

2018 年度 立命館附属校・提携校 国際教育研修会

附属校教育研究・研修センター

12月7日(金)にアメリカ合衆国において組織のダイバーシティ&インクルージョンを推進するコンサルタントとして、また、異文化感受性トレーニングの第一人者として活躍されるメーカー重希子氏を講師にお迎えし「多様性の中で学び、異文化感受性を育くむ」というテーマで研修会を実施した。研修は様々なワークを取り入れながら、異文化感受性の基礎を理解し、教育に生かすイメージが湧く内容であった。参加者全員は楽しく、頭も心もいっぱい動かす時間を過ごすことができた。

参加者は立命館中高2名、立命館小8名、立命館宇治中高5名、初芝橋本中高1名と教職研究科院生1、立命館大学教員2名、その他の方2名に加えて附属校副校長先生、研修を企画頂いた立命館小・中・高代表校長先生を合わせて、計23名となった。

【研修の記録】

Q、文化って何？ Q、異文化って何？ Q、異文化感受性って何？

自己紹介から始まった。

研修会の前半は、異文化感受性の基礎を知ること。後半では異文化感受性発達理論を教育に活かしていくといった流れであった。

《本日のミッション》

メーカー先生から、多様性社会、グローバル社会を生きる力を育てる教育、異文化感受性を育む教育をしていると仮定した場合、教育はどう変わるか、どんな新しい視点が得られるかを皆さんと考えていきたいと本日のミッションを伝えられた。

《柔らかアタマ体操》

心と頭と身体も動かすために柔らかアタマ体操として、「ピンポンパン」、「連想ゲーム」、「反連想ゲーム」を行った。「反連想ゲーム」は指名された人は前の発言と違った全くちがった単語を言うものであった。3つのゲームのうち最も難しかったのは「反連想ゲーム」であった。連想はしてはいけないルールなのについ連想してしまうところに難しさがあった。

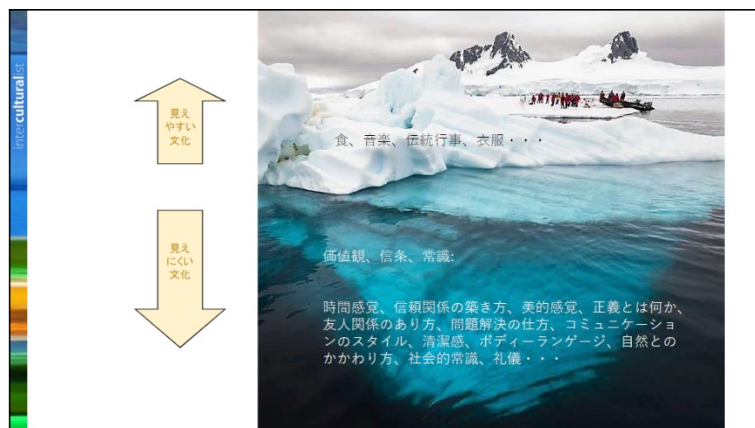
《「文化って〇〇みたいなもの」？》

文化と言われて何を浮かべるかという質問を受講生に投げられ、様々な回答があった。そして、メーカー先生は様々な回答を見えるものと見えないものを分けられた。

《「文化って冰山みたいなものと言われるが、なぜ。」？》

受講者の回答を受けて、先生は文化には見えている部分と見えない部分があり、2つを合わせて文化であることを話された。見える部分は食、伝統行事、衣服などがあり、見えない部分には、価値観・社会的常識・礼儀などがある。

そして、見えていない部分は大きく、忘れがちで目を向けないことが多い。しかし、私たちが目で見える部分は見えない部分に支えられてい



るということを知ることが大切である。たとえ、見える習慣が違っていても、目に見えない部分につながった理由があることを忘れてはならないと話された。

《「異文化とは何か」》

文化が冰山みたいなものなら「異文化とは何か」という質問の答えを考えていくためのゲームをした。

1人1枚のカードを渡された。まず、自分のカードを一瞬だけ見て、何が書かれているかという質問を受けた。四角で青っぽい形という回答が殆どだった。

次に隣同士で見比べた。今度は同じ四角で青っぽい形でも様々な違う部分があることがわかった。

さらに、10人くらいのグループになり、各自のカードを見比べた。似ている点を探したり、違いを見つけたりした。ただし、大きな違いはなかった。

メーカー先生から「目立たないカードが欲しいか、欲しくないか」質問され、「目立つカードが欲しい。」と言った受講者に目立つカード（青ではなく赤丸が描かれカード）を渡された、

みんなと違うカードを渡された受講者は仲間はずれになったような気持ちと感想を述べた。しかし、他の受講者から「形は一緒、よく見たら一緒。」とか、「ちょっと経験したい、慣れるかもしれない。」などの意見が出てきた。



ゲームを終え、カードを見ていった過程（1人→2人→多数）をダンスフロアでダンスをする立場（当事者）とバルコニーから眺める立場（第3者）で振り返った。全員が青いカードを持っている中で赤のカードを見たときの緊張、違いを見つけ、さらにもっと違いを見つけたこと、違いを見つけることが楽しくなったこと、共通点を見つけようとしたことなどが出てきた。

メーカー先生は異文化感受性とは冰山お全体を見る力、水面上と下を見る力、他の冰山（国、地域、家族）と同じところと違うところを見つける力、違う冰山とどうやって関係を築いていくのか、いろいろなアイデアを出しながらコネクションを見つける力、それと同時に違うところを見つける力ですと言われた。異文化感受性は発達段階で少しずつ育っていくものとも考えられている。その発達のプロセスをイメージできたら育てやすい、サポートしやすいのでは言われた。

《異文化感受性発達理論》

最後に異文化感受性とはどんな段階を経て育っていくのか考える「異文化感受性発達理論」について考えた。

メーカー先生は受講者に対して、好きなものを聞かれ、1人がビールと回答した。そこで、ビールの好みを質問され、ビールが好きでも銘柄に拘る人、ビールなら何でもよい人、ビールを飲まない人が存在することを例えとして異文化感受性発達理論について分かりやすく説明された。ビールの感受性で人の価値は決まることは無いように、異文化感受性の発達段階によって人の価値とは関係がない。経験、教育、サポートなどで人はその発達段階にいる。自分がどういった段階にいるかを分かることでもう少し発達してみようと思うと発達できる。教育者と

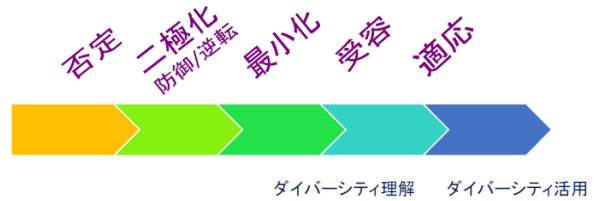


して、子どもに発達させたいかと思うかどうかであるとメーカー先生は受講生に問いかけられた。

異文化感受性発達理論のプロセスは「否定」から始まる。悪気は無いけど文化の違いを考えたことが無い段階である。

異文化感受性発達理論

次に経験を積むことで「二極化」の段階になる。違いに気付く。比較したり、対比したりすることができる段階。二極化には自分の考え方を守る防御と別の方がいいという逆転がある。コントラストを見る段階で大事な学習をしている。白黒しかなく、ストレスを感じる段階である。



3つ目の段階「最小化」である。視点を変えて、同じところを見つけようとする段階である。仲良くしようという姿勢が生まれる。違うところを最小化し、安心安全を求める段階である。違いを見ない。例えば、メーカー先生は、アメリカ人から日本人に思えないくらい英語が上手といわれることをあげられた。このような組織では、引っ掻き回す意見を言えなくなる。

4つ目は「受容」である。白黒の偏りが減る。両方大事にする。同じところも違うところもいっぱいある。両方大事と思うことができる。受容の段階の組織は少ない。理解できる。しかし、困難なことが生じたらどうしたらいいか分からない、多様性を生かすことが見えない段階である。

最後はもっとも発達している「適応」の段階である。この段階は、ミステイクしながらでも多様性を生かすアイデアを出すことができる。レポートが多く、懲りずに実行する。失敗したら謝れる、ヘルプを求められる段階である。こういった環境の中で子どもを学ばせたい。

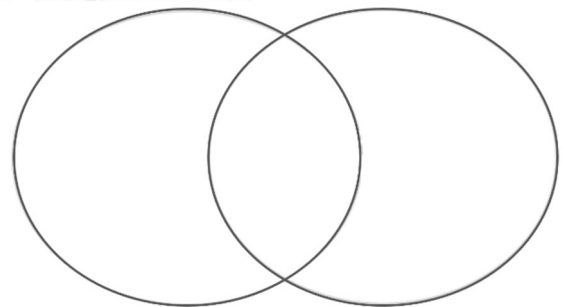
日々の授業中でも二極化、最小化がどんなときに起きるかを考えて欲しい、また日々の会話の中に取り入れて欲しいとメーカー先生は言われた。

《異文化感受性を育てる極意》

同じところを見つけることと違うところを見つけることであるとメーカー先生は言われた。同じところを見つけると安心感、親近感、共感性などの相手の気持ちを思いやる力が育つ。違うところを見つけると好奇心が育つ。最小化の段階で好奇心が薄れてしまうので注意する必要がある。好奇心が育つともっと面白くなる。

極意を試してみるには右図のような2つの円を描き、1つの円は自分の名前、もう一方の円に理解し合いたい相手の名前を書く。共有する領域に共通することを、それ以外の領域は各自のユニークなことを書いていく。どこの領域が書きやすかった、書き難かったかを探し、自分自身を含めて知る努力をして見る。特に共有する領域が不足していたなら、自分から相手にアプローチしていくことが大事である。

★ 極意を試してみましょう



(記録 立命館大学 教職大学院 M2 末廣 純成)

(編集 附属校教育研究・研修センター 羽田 澄)